新 刊

□得居 修：**えひめの木の名の由来** 493 pp. 1995. 愛媛の森林基金. ￥2,030＋送料.

本書は著書は得居氏なのだが，奥付以外にはそれが表示されていない．県農水産部内の「愛媛の森林（もり）基金」が企画した事業として調査刊行されたものではあるが，真の製作者が表にでてこないのはおかしなはなしである．発展途上国の刊行物で，実際の製作者ではなく，それを命じた機関の長や機関名しか表に出ていないものがあるが，それと同じ印象を受ける．著者として奥付に名前がある以上，主体となって努力した人の責任を明らかにするうえでも，表紙に氏名を入れるべきである．こういう本は，図書の整理のときたいへん困るのである．発行者の理解が望まれる．

われわれが植物学的情報交換を行う際には，植物名は記号として扱われ，学名や標準和名のような，種類と1：1に対応する名前しか用いない．これに対して方言名・俗名はその土地々々の人々が生活の必要上用いるもので，民族文化の所産である．それを記録しておくことは，単に無形文化財を保存するという消極面ばかりでなく，各地でそれらが集積されれば，文化の流れを解明したり，標準和名を解釈する手段となり得る．しかし植物方言調査という仕事が理学部や農学部に受け入れられる余地はなさそうで，地域の研究者の永年にわたる地道な努力に待つほかはない．最近刊行される植物図鑑や百科事典類には，専門家による和名の由来の解説が見られるが，先行大家の解釈を民族文化の素養のないまま不用意に受け売りすることについて，深津 正氏が本書巻頭の小文でそれとなく批判しておられる．本書は愛媛県産の313樹種について，ほぼ同じ形式で記述されている．まず標準和名とその植物学的記述があり，続いて各地での方言名が市町村名と共にリストされている．記述年代や情報提供者についてのメモも，今後は必要になるだろう．というのは，方言名といっても新旧があり，最近のラ抜き言葉のように，日本語の変遷と密接に関係していることがあり得るからである．方言名を時間の中に位置づけておけば，その応用は植物分野を超えて広がる可能性がある．それから標準和名についての解説が，多数の文献を引用して述べられ，続いて方言名についても実地調査の見聞を取り込みながら解説され，農事をはじめとする言い伝えが紹介されている．最後に，それらの裏付けとなる用途や民俗などがつけ加えられ，読み物としても興味をそそられる本である．

愛媛に限ったことではないだろうが，ヤマブキにトウシンという方言名があり，コゴメウツギ，キブシ，コガクウツギにも類似した名前がついていて，灯心に用いるとある．かつてわが家の燈明皿でヤマブキの髄を試したことがあるが，油を吸い上げてくれず失敗した．切片を作って見たら，本物の灯心（たぶんイグサ製）とは細胞間隙の量に大差があり，ナットクしたことがある．燈明として使うためには，髄の処理法にコツがあるのだろう．学校ではモミジの果実が「プロペラのように回転して飛ぶ」と教えているらしいが，あれが二つに分離することを，教師は見ていないらしい．言葉だけですべてを伝えることは，なかかなむづかしいものだ．連絡先は〒790-0001 松山市一番町4-2-2. 愛媛県農林水産部森林整備課，（財）愛媛の森林基金（電話089-941-2111 内線3361）.（金井弘夫）

□八田洋章：**木の見かた，楽しみかた ツリーウォッチング入門** 294 pp. 1998. 朝日選書. 朝日新聞社. ￥1,500.

季節を追って，樹木を相手にした自然観察の着眼点を物語る本である．自然観察は盛んであるが，「名前を覚える」ということが目的になり勝ちで，その先は名前の由来とか有用性とか自然保護とか環境問題とかへ高飛びしてしまって，植物自体をじっくり知るという方向へはなかなか行かない．人とつき合うにしても，住んでいる町や家の造作をながめるより，その人の目鼻だちや能力を知る方が，より良く知る助けになるだろう．植物ではどこをどのように見たらよいかということを，わかり易く書いた本がないことが一因だと思

う．芽鱗のはがれ方，枝の伸び方，葉のひろがり方，樹皮のはがれ方，葉の落ち方と，言われなれば見過ごしてしまうことがらが取り上げられている．花を見て名前を調べるだけが観察ではないことを，理解してもらうのによい本である． （金井弘夫）

□坂崎信之ほか：**日本で育つ熱帯花木植栽事典** 1,211 pp. 1998. アボック社. ¥59,000.
公園や花屋の店先の色どりが増したのは，花の万博以来のことだろうか．種苗の入手が以前より容易になり，折からのガーデニングブームも手伝って，植栽についての新しい知識の普及が望まれるときに，時宜をえた刊行物である．扱われている花木は294属2,236種類に及ぶ．まず約700頁（厚さにして半分）にわたるカラー写真と植物画で，それらが学名順に紹介される．続く300頁が事典篇で，同じ順序で特性や栽培について簡単な記述があり，品種についてはくわしく取り上げられている．とりわけわが国における植栽可能地域（後出）について，日本地図上に図示すると共に，各地での越冬の実績や花期についての記述がある．概説篇では花木の故郷である熱帯各地の環境と，植栽上の留意点が簡単に記されたうえ，植栽可能地域についてのくわしい説明がある．植栽可能地域（Hardiness Zone）は，米国農務省が年最低気温を基準にして植栽適温地帯を定義したもので，本書では各2区分をもつ3地帯が，ランタナ・ゾーン，デイコ・ゾーンなど，それらに代表的な植物名で名付けられている．わが国の Hardiness Zone の設定はこれが初めてのことではない．林弥栄・小形研三（1990）樹木アートブックI（アボック社）で，本書の著書坂崎と輿水肇によって，日本全国の気温記録，高度，経緯度のデータを処理して，8地帯12地区のクライメートゾーンが定義されている．これらのゾーンは植栽を目的として定義されたものであるが，自然分布を論ずる際にも参考とする価値は十分認められる．巻末に花木の導入年表，熱帯花木のみられる世界各地の植物園の紹介，各種の索引がついている．
（金井弘夫）

□酒井治孝（編）：**ヒマラヤの自然誌** 292 pp. 1997. 東海大学出版会. ¥2,000.
九州大学の市民公開講座をもとに，専門の異なる16人が執筆している．トピックは地質，気象，氷河，植生と利用，サルとヤク，水資源，災害，台所事情，健康，民族問題と多岐にわたって，今日的問題が語られている．地質構造を示すのに，食パンとハムとチーズと海苔とピーナッツを重ねた口絵のカラー写真が，なんとなく中をのぞいてみたい気を起こさせる．内容は統計表や図解を使ったかなり高度なものである．登山と観光トレッキングそれに NGO 花盛りのヒマラヤについて，もう少し広い予備知識と問題意識を得たい人におすすめする． （金井弘夫）

□吉田忠生：**新日本海藻誌** 25 + 1222pp. 1998. 内田老鶴圃. ¥46,000 + 税.
岡村金太郎先生の「日本海藻誌」の出版が1936年であるので，60有余年を経て増補改訂版ともいうべき「新日本海藻誌」の刊行である．扱われる種は「岡村：海藻誌」より約400多く，緑藻綱230種，褐藻綱308種，紅藻綱838種の計約1,375種に及ぶ．なおプランクトン性海産藻類は扱っていない．学名に関する命名上の規約を解説した凡例に始まり，綱の解説，目の検索；目の解説，科の検索；科の解説，属の検索；属の解説，種の検索，そして種の解説へと続く．各綱，目，科，属には命名者名，創設年，記載文のページが記され，また目，科，属にはそれぞれタイプ科，タイプ属，およびタイプ種の名が記される．属名がどのような意味をもつかについても解説がある．種の記述では，種名，著者名，記載年，記載ページ，和名，シノニムと続き，さらにこれまでに引用された主要な文献が挙げられ，また必要に応じて図の挿入がある．続いて種の特徴の記述，タイプ産地，タイプ標本の保存場所，地理的分布と続き，わかっているものについては深さの分布が記述される．また分類上問題のあるものについては解説が加えられる．文献は1997年までのものが67ページに亘って詳細に引用される．「岡村：海藻誌」以後に記録された種類も含め，日本産の全海藻を網羅するので，本書は海藻の同定